

サンドウィッチマンさん

東北は必ず復興します！
日本をナメるな！ 東北をナメるな！

2007年M-1グランプリで敗者復活から優勝を勝ち取ったその並外れた精神力で東北復興にも力を注ぐ二人。被災当時の様子や現地の復興について伺った。



PROFILE

高校の同級生だった伊達みきお（ツッコミ）、富澤たけし（ボケ）によるお笑いコンビ。1998年コンビ結成。2007年のM-1グランプリにて史上初の敗者復活から優勝し、注目を浴びる。2011年3月、TV番組収録中に東日本大震災が発生し、被災した経験を持つ。現在はTV、ラジオ番組に多数出演する傍ら、東北の復興支援にも力を入れており、『“東北魂” 東北地方太平洋沖地震義援金口座』と銘打った募金活動は約4億円にも上る。

——お二人の出会い高校のラグビー部と
言うことですが、そのときのお二人の印象
というのはいかがでしたか。

富澤（右ページの写真右側）…なんか目のか
わいいやつがいるなと…。

伊達（同左側）…同じような体格をしたやつ
がいるなと…。（一同爆笑）

——もともとラグビーをはじめるきっかけは
何だったのですか？

伊達…小学校のころ3年ほど大阪に住んで
いて、そのとき父親に花園ラグビー場につれ
ていつてもらって、当時は新日鉄釜石が全
盛期でその試合を生で観たのがきっかけです
ね。あとはテレビドラマの『スクール☆ウオ
ーズ』ですね。男子校だったのでやっぱり男
にしかできないスポーツだなと思ってはじめ
ました。

富澤…僕は学ランが着たかったからですね。
しかも不良の。当時「学ランが着たいから
その学校に行きたい」って親に言えなかった
ので、学力的にもちようどいいところでラグ
ビー部があつたので「やってみたい」と親を
説得したのがきっかけですね。でも、僕らの
入学した年からブレザーになったんですよ。

——それはなかなか…。

富澤…地獄でしたね。（一同爆笑）

——その後どうしてお笑いの道を目指そう
と思ったのですか？

富澤…昔からテレビを観ていて楽しそうだな
って思っていて…。なんか遊んでいるみたい
な感じに見えるじゃないですか。それでお金

をもらえるっていいなって思いましたね。

伊達…僕は単純に富澤に誘われたって感じ
ですね。もともと5年ほど福祉関係の会社
に就職して働いていたんですけど、その間も
ずっと誘われていて…。

——5年間ずっと誘い続けていたのです
か？

富澤…そうですね、でも親のコネで入ったん
で「やめられない」って。

——コンビ結成からテレビに出るまでは、
どのような気持ちで活動されていましたか？

伊達…どうやってたらテレビに出られるんだろ
うって思っていましたね。でも、日々のライ
ブを頑張っていれば誰かが見つけてくれるっ
という感覚でやってましたね。

富澤…当時はちようどお笑い番組がどんど
ん少なくなっていたときだったので…。ただ
やれることはライブに出ること、やってけれ
ば何とかなるって思っていましたね。

——つらいと思ったことはありませんでした
か？

伊達…そうですね。でも周りが同じような
環境だったので、それが普通だと思つてやつ
ていましたね。もちろんお金は無かつたです
し、富澤と二人で住んでいましたからあまり

あまり好きなこともできなかったで
すけど、特につらいなとは思わなか
つたですね。

好きなこともできなかったですけど、特につ
らいとは思わなかったですね。

富澤…でも周りの人たちがやめていったり、
TVに出だしたりすると焦りつつというのはあ
りましたよ。

M-1グランプリについて

——優勝したときはどんな気持ちでした
か？

伊達…特に僕らは敗者復活からでしたので、
選ばれると思っていなかったところから突然
華やかなステージに立たされ、状況もしっか
りつかめないまま漫才をやったという感じだ
つたので、あつという間でしたね。ですから
あまり覚えていないんですよ。

富澤…色々なことがあつという間だったの
で、なかなかそのときは実感がわかなかつた
ですね。でもその後、道を歩いていたら「あ、
サンドウィッチマンだ！」ってもう言われて
いたので、こんなに影響力があるのかなって
感じでした。

——一度は敗退してからの優勝でしたが、
敗者復活戦のときの心境はいかがでした
か？



——M1では1回戦から決勝までやるネタの順番はあらかじめ決めていたんですか？

伊達…決めてはいなかったです。ここで負けるわけにはいかないっていう場合は、ちょっと強めのネタだったりっていうのはありました。

——お二人の持ちネタの数は、どのくらいあるのですか？

伊達…ネタとしては結構ありますけど、TVでやれるネタは限られていますね。今は単独ライブをやるために新ネタを1つ創ることくらいしかできていないです。それでも年間で6つくらいは創っていますね。そこからまたずっと使っていけるネタっていうのは、そんなに無いですね。

——漫才やコントで台詞がとんだりすることはありませんか？

伊達…ああ、あります、あります。もちろん。——あるんですね(笑)。立て直せるんですか？

伊達…モノにもよりますね。役に入りきっているコントの場合は難しくなりますけど、漫才の場合は全然立て直せますし、お互い「あ、とんでるな」っていうのがわかります。——お互いにとぶんですか？

伊達…僕のほうが多いですかね。(一同爆笑)
富澤…M1の決勝でも一瞬とんでましたよ。——優勝してからは生活や周囲の反応等は変わりましたか？

伊達…全然変わりましたね。それこそ収入、仕事量、あとは知名度とか。僕はそんなに変わっていきなくてただ漫才をやっているだけなんですけど、何が変わったって聞かれるとやっぱり周囲が変わったと感じますね。

富澤…優勝してからは半年間休みが無かった。「ああこんなになるものかな」って、正直思いましたね。

東日本大震災と復興支援に活動について

——お二人は東日本大震災の発生当日、東北にいらしたそうですが、そのときの現地の様子と心境を教えてください。

伊達…仙台でやっている番組のロケで気仙沼に行ってたんですけど、その日は朝からロケで、地震があつた14時46分はちょうど魚市場にいたんです。地震の来るちょうど5秒前くらいに携帯電話から初めて聞いた音が鳴りだして、「何だ？これ」って携帯を見たら「あつ、地震だ！」って感じで…。

「おい地震が来る」って言ったら次の瞬間震度6強の地震が来て、建物からはみんな次々と降りてくるし、結構揺れは長くつて、本当に大騒ぎでしたね。

近々宮城県沖地震が99%来るっていうのは宮城県民皆が知っていたので「とうとう

近々宮城県沖地震が99%来るっていうのは宮城県民皆が知っていたので「とうとう来たか！」という感じでした。

伊達…僕らの場合は3年連続敗者復活だったんですよ。1つの会場で50組が漫才をやるんですね。みんなおもしろくて…。お客さんもたくさんいてみんな笑いに来っていて、やりやすい会場だったんですよ。だから何の気負いも無く、ただいつも通りに漫才をやったっていう感じでしたね。

富澤…準決勝の時点で「ちょっと難しいかな」っていうネタだったので負けたときは「ああ負けたか、でも敗者復活戦があるしな」くらいの感じでした。



来たか！」という感じでした。ただ揺れが収まってからは道路にヒビは入っていましたが、別に建物が崩れたわけでもないし「とにかくみんな無事だね、ガラスも割れていないね、収まった収まった」って感じですね。でもめちゃくちゃ怖かったですよ。

富澤…「津波が来ます」みたいな放送が入ったんですけど、僕らとしては津波っていうのはだいたい5cmが来ましたが、10cmが来ましてって感覚だったので「じゃあちよっと見てみようか」って感じでしたね。

——じゃあ、その時はこれほどの被害に比べると思っていないかった？

伊達…いや全く思っていないかったですね。

——被災された方の復興支援をはじめようと思ったきっかけは、何だったのですか？

伊達…やっぱり僕らも逃げていなければ完全

にアウトだったと思うんです。実際逃げて助かって、津波が沖から陸に向かってくるのを見ていて、また町が飲まれていくところも見ていた。なかなかこういう経験をしている人っていないと思うんですね。

たまたま気仙沼にいて、たまたま逃げて助かって、そうしたらあんなにたくさん犠牲者がいるということをその日の夜にラジオで聞いて。何かしないといけないなって…。

最初は日用品が欲しいだろうけど、そのうちきつとお金が必要になってくるだろうなって思ってた。義援金口座を立ち上げたんです。

——周囲の方々の反応っていうのはいかがでしたか？

伊達…震災直後っていうのは本当にみんな心配してくれて「よく大丈夫だったな！」って声をかけてくれたりとか、先輩方も楽屋に来て「これ使ってくれ！」って言うってお金をくれたりとかほんとに協力いただいた…。ほんとに仲間っていいなって思いましたね。

——復興支援活動の中で、つらいと思った

芸人というよりも
宮城県民としてやらなくちゃいけないこと、やれることをやろう！
って思いました。

ことはありませんでしたか？

伊達…中には「芸人なんだから、震災のイメージをつけやうと良くないんじゃないか」「笑えなくなっちゃうよ」って言う方もいましたね。でも僕らはそれを割り切って、芸人というよりも宮城県民としてやらなくちゃいけないこと、やれることをやろう！って思いました。

富澤…やっぱり色々な方と話していく中で、身内の方が亡くなったり、いまだに行方不明なんだっていうときに、かけてあげられる言葉が見つからなくて、そのときはつらいなと思いましたね。

伊達…結局何の役にも立たないんですよ。芸人がいくら被災地に行っても…。震災から1年くらいは全く役に立たなかったですからね。でも1年ほど経って被災地に行けば寄ってきってくれる人もいたり、写真撮ったりとか、サインちょうだいとか言う方もいるんですけど、そういう方々は家とかは流されたかもしれないけど、家族は全員無事とかっていう方がほとんどでした。

直後はそんな余裕も無かったですから。



特に有事のときには、県や市区町村の方々は自分の動きについていうのができないんだなって感じましたね。

みんな目は血走って、身内を探していたって
いう状況でしたからね、当時は。だから自
衛隊の方とか、警察、消防、ボランティア
の方々とかはほんとにすごいと思いました
ね。「ああ、かなわないな」って思いました。
——今お話にも出ましたが、現地での自
衛隊、警察、消防の方の活動を目の当たり
にされていかがでしたか？

伊達…いや本当にすごいと思いましたね。
本当に命がけなんだなって。当時被災地の
あたりにいた人は、みんな頭が上がりません
と思いますよ。

他でもちよつと話したことなんですけど、被災したときに僕は高台に逃げましたという
ことでロケバスで高台に避難したんですけど、
ど、そのときに消防車とすれ違っているん
ですよ。僕は山の方に向かって走っているん
ですけど、消防車は海に向かって走って行
くんですよ。その時の映像があつてそれを
TVで流したんです。そうしたらその後プロ
グだったと思うんですけど書き込みがあつて
「旦那の最期の勇姿が見られて良かったです」
って…。たぶんその消防車に乗っていた消
防士の方がご主人で、そのまま亡くなつてし
まったんだと思います。そのことは今でも覚

えていますね。

また、ある市役所の方だったと思います
けど、震災以降自分の家がどうなっている
のかもわからず、家族との連絡も取れないま
ま避難所設置という公務に専念したのです。
で結局自分以外の家族は皆亡くなつていて、
それが3日後に判明してつていう…なんか本
当に大変な仕事だと思えますね。

特に有事のときには、県や市区町村の方々
は自分の動きについていうのができないんだな
って感じましたね。

あと、我々は現地にいたのでわかつてい
るんですけど、あまり警察の方の頑張りつてメ
ディアでは取り上げられていないんですよ。
色々な県の警察官の方に来ていただいて…
震災から1、2年後も千葉県警のパトカー
が走っていたりしましたから。あれはね、ほ
んとに僕ら心強かつたんですよ。

あとは震災の翌日の3月12日の朝、東京
消防庁の消防車が気仙沼にいたんですよ。
「動き早いな！」「助けに来てくれた！」つ
て思いましたね。「大変な状況なのに、この
人たちが助けに来てくれた」つていう安心感
を与えてくれたと思いましたね。

富澤…自分の家族よりも業務を優先しなき

やいけないつていうのは、なかなかわかつて
もらえない仕事だなって感じますね。もつと
メディアで取り上げてもいいのになあ、つて
思いますけど。

——仕事をしながらの被災地支援活動は、
体力的にもキツかつたんじゃないですか？

伊達…でも行くことやつぱり喜んでくれる人が
いるし、僕らも地元なんで、できる限り行
きたかったです。

いっぱい聞かれるんですよ。「東北の方ど
うなの？」つて。そういうことを聞かれた
ときに新しい情報が無いと、僕らも「支援
活動やつてる」つて言っている割にはそん
なに行つてないやつて言われるのが嫌だつた
ので、できる限り行こうつて話は二人でし
ていました。回数ではないとは思んですけど、
でも、それでも隅から隅まで行こうつて思
いましたね。

——具体的にはどんな支援活動をしてい
たんですか？

伊達…義援金つていうのが主な活動なんで
ですけど、現在でおおよそ4億円が集まつて、
もちろん被災地に届けています。

義援金の名称『東北魂』つていうのもた
また震災前に単独ライブで作つていたステ
ッカーやTシャツなんですよ。震災があつて
「義援金口座を立ち上げよう、口座名を何に
しようか？」つて言つたときに『東北魂』
がいいんじゃない？ つていうことで決めた
んです。

富澤…あとはバスツアーとかをやつていて、



東北の方へ足を運んでもらおう、観光してもらおうってことをやってたりします。

伊達…その中でチャリティーライブをやったりしていますね。

—— 現地の復興についての課題は何だと思えますか？

伊達…震災以降1、2年は目に見える復興っていうのがあったんですよ。例えばがれきが無くなるとか、見たらすぐわかるっていう。でもそれ以降は進んでいないように見えるん

です。だから被災地に行っても「あんまり変わっていないな」と思うんですけど、実は現地では一生懸命、着実に進んでいるんですよ。

地方なので復興はこれでも早いはずですよ。これが大都市だったらもつともつと大変だろうし、時間もかかっていますよね。とにかく現地では色々なことを一生懸命やっているのがわかるので、これ以上焦らせることも無いんですけど、宮城は防潮堤の問題等はあるにせよ、まだ比較的復興が進んでいる方だと思っています。

今はやっぱり福島が進んでいないと思いますね。まだまだ家に帰れない人たちが大勢いるので…。その目処だけでも何とかつけられたらいいなと思います。

富澤…仮設住宅がたくさんあって、最初は居住期間は2年って言うていたのでそれだけまだうまく移転ができていないっていうことです。それから、そういうところの問題がまだまだあるなと思っていますね。

—— 今後の復興支援活動について教えてください。

伊達…引き続き義援金の活動をやっていきたいですね。現在は震災の遺児、孤児のた

めに義援金を使っているんですけど、それを継続していきたいなと思っています。あとは、支援っていうことではないんですけど、東北の近況なり、復興状況を全国の人たちに伝えていけたらいいなと思っています。

伝えることで、全国の人達に恩返しをしなくちゃいけないんだと思いますね。たくさん協力していただいた人達に「ここまでに復興しましたよ」とか「まだまだ実はこういう状況ですよ」とか「ぜひ見に来てください」観光に来てください」っていうことを全国に発信することが主な活動になっていくと思います。

—— 大変貴重なお話をいただきありがとうございます。今後益々のご活躍を期待しています。

(インタビュー・執筆／協会職員 田代洋介)

最後にお二人のネタの中で

BEST3を挙げていただきました。

1位…ピザのデリバリー

2位…街頭アンケート

3位…ファストフード・美容院

東北の近況なり、復興状況を全国の人たちに伝えていけたらいいなと思っています。